

# た か い し



<http://www.suginami-school.ed.jp/takaido4shou/>

杉並区立高井戸第四小学校

## 「子供を勇気付けて伸ばす」ということ

校長 本橋 忠旗

二十四節季では、12月初旬は「小雪」。日差しも弱まって、木々の葉が落ち北国や山頂などでは小雪が散らつころ、冬支度を始めていく時季とされています。22日は「冬至」、街には、きれいなイルミネーションが施されるようになり華やかさを感じます。先月の音楽会には多くの方にご来場いただき、ありがとうございました。

さて、以前、興味深い本に出会ったことがあります。その本は、アメリカの心理学者が書いたもので「私たちの人生は、心のあり方に大きく左右される」という主旨のものでした。本には、次のような調査が紹介されていました。ある生徒群、数百人に対してテストを実施し、2つのグループに分けてから、次のようなほめ言葉を掛けました。一方は、「よくできたね。頭がいいね。」と、生徒の「能力」をほめるグループ。もう一方は、「よくできたね。頑張ったね。」と、児童の「努力」をほめるグループ。すると、ほめ言葉を掛けた直後から、生徒の行動に違いが出てきました。

能力をほめられたグループの生徒に次の問題を選ばせると、新しいチャレンジを避けたり、ボロが出て自分の能力が疑われたりするかもしれないと、新たなことを一切やりたがらなくなりました。難易度の高い問題を与えても、「自分は、ちっとも頭がよくない」と思うようになったそうです。一方、努力をほめられたグループの生徒は、その9割が新しい問題にチャレンジすることを選び、難易度の高い問題を与えられても、「もっと頑張らなくちゃ」と解けないことを失敗と思わず、自分の頭が悪いとも考えることもありませんでした。この調査からは、同じ経験でも「能力を固定的に考える価値観」と「能力は努力次第でいくらでも伸ばせると考える価値観」では、生徒のその後の行動に大きな影響を与えるという指摘がなされていました。

では、大人の関わり方は、どうしたらいいのでしょうか。本には、次のような事例も紹介されています。「ある競技会に参加した我が子が、入賞を逃した。落ち込んでいる我が子に、どのような言葉を掛けるか。①あなたが一番上手だった ②判定がおかしい ③勝ち負けなんて大したことはない ④あなたには才能があるから次は大丈夫 ⑤今回は入賞できる力がなかった」日常によくありそうな事例ですが、この場合、⑤がふさわしい言葉掛けになります。自分以上に努力してきた選手が大勢いる中で、本気で勝ちたいと思うならさらに努力しなくてはいけないこと、つまり「失敗から何を学ぶべきか、将来成功を勝ち取るには何をしなくてはならないか」を教える必要があるということです。

2学期もあと3週間余りとなりました。最終日には、通知表をお渡しします。1学期との比較に関心が行くところですが、子供の努力や成長、変容に視点をあて、「やればできる」「頑張ろう」「やってみよう」という、そんな子供に対する大人の関わりの参考にさせていただきたいと思います。子供にとってその前向きな言葉掛けから得られたエネルギーが、新年を迎えるにあたっての目標や決意になるのではないのでしょうか。

ちなみに、この2つの心のあり方は、一個人の内で固定化されるものではなく、場面によって表れ方が異なるものだそうです。自分を成長させることを考えると、能力と言う壁を作らず、私たち大人も自分を変容させる柔軟さをもち続けていきたいと思うこの年末です。